

2024年1月7日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 29 「魂を養う糧」

詩編23：1～6、ヨハネ6：52～56

問78 それでは、パンとぶどう酒がキリストの体と血そのものになるのですか。

答 いいえ。洗礼の水は、キリストの血に変わるのでも罪の洗い清めそのものになるのでもなく、ただその神聖なしるしまだ保証にすぎません。そのように、晩餐の聖なるパンもまたキリストの体そのものになるわけではなく、ただ礼典の性格と方法に従ってキリストの体と呼ばれているのです。

ここにはローマ・カトリック教会の聖餐理解に対する明確な批判があります。カトリック教会では聖餐のパンがイエスさまの体に、ぶどう酒がイエスさまの血そのものになるという信仰があります。「化体説」あるいは「実体変化」と言います。これは高度な神学的教えでして、例えば、パンを実体と偶性（形態）に分ける。少し哲学を学んだ人はプラトンやアリストテレスを思い浮かべるかもしれません。物を実体と偶性に分けて考える。パンにも実体と偶性がある。化体説でいきますと、パンの形態、つまりパンの匂いや味はそのまま、その実体がイエスさまの体に変わる。聖餐においてそのパンの中の実体であるイエスさまを受け取り、その恵みに与るといいます。しかし、それではやはりパンを神聖なものにしてしまうでしょう。イエスさまの救いの出来事は後退し、見えるパンと杯を礼拝の対象にしてしまうのです。

しかしこれはわたしたちに無関係なことではなく、わたしたちも目に見えるものに心惹かれやすい傾向があります。見えるものはわかりやすいですし、目に見える豊かさや成功に心惹かれるでしょう。ともすると神さまの救いもこの世で成功するために、豊かになるためのものと考えます。救いが極めて現世のご利益的なのです。このお正月の時期は、神社、仏閣が賑わいます。そういう光景を傍目で見ながら、自分はそういうご利益宗教ではないと思いつつも、実はそのような見えるところで救いをはかるようなことをしているのではないかと。良いことがあれば救われている。悪いことがあれば救われていないと考えて一喜一憂するのです。

しかしわたしたちはそういう見えるところに救いを見ているわけではありません。パウロも言います。「見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです」（ローマ8：24～25）この見えないものが何であるのか。聖餐はこの見えないものを見る食事です。もちろんパンとぶどう酒は見えるのですが、このパンとぶどう酒の向こう側に見える世界がある。それこそ信仰がなければ与れない食事なのです。

問79 それではなぜ、キリストは、パンを御自分の体、杯を御自分の血またその血による新しい契約とお呼びになり、聖パウロは、イエス・キリストの体と血にあずかる、というのですか。

答 キリストは何の理由もなくそう語っておられるわけではありません。すなわち、ちょうどパンとぶどう酒がわたしたちのこの世の命を支えるように、十字架につけられたその体と流された血とが、永遠の命のために、わたしたちの魂のまことの食べ物また飲み物になるということを、この方はわたしたちに教えようとしておられるのです。そればかりか、わたしたちが、これらの聖なるしるしをこの方の記念として肉の口をもって受けるのと同様に現実には、聖霊のお働きによって、そのまことの体と血とにあずかっていると

いうこと。そして、あたかもわたしたちが自分自身ですべてを苦しみまた十分成し遂げたかのように、この方のあらゆる苦難と従順とが確かにわたしたち自身のものとされているということを、この方は目に見えるしとしと保証を通して、わたしたちに確信させようとしておられるのです。

パンとぶどう酒はこの世の命を支える糧です。これは信仰問答が書かれた時代の人々にしてみれば、言わば主食のようなものでしょう。わたしたちに見ればご飯とお味噌汁のようなものです。それがわたしたちの肉体を支え養うということを体験的に知っています。でも単にそれだけではありません。このお正月も久しぶりに会う家族と一緒に食事をされた人たちもいらっしやるでしょう。家族で食卓を囲むことは、ただ肉体の養い、栄養補給ということだけではありません。家族の関係、絆を強め養います。そういう特別な食事です。

問答には「魂のまことの食べ物また飲み物」とあります。魂とは人間の創造で神さまに命の息を吹き入れていただいた時に「人はこうして生きる者となった」（2：7）部分です。神さまとの交わり、つながりを求めている部分が魂です。人間が生きるためにはその魂が養われる必要があるのです。アウグスティヌスが「わたしたちの心はあなた（神さま）のうちに安らうまで安んじない」（『告白』）と言いました。神さまとの交わりの中で人間は安らかなのです。そしてそれこそが「永遠の命」に他なりません。この永遠の命を人間は神さまに背き罪を犯して失っておりました。しかしイエスさまの十字架とよみがえりによって、その命に与ることによって、わたしたちは永遠の命を再び回復することができました。わたしたちの人生の先にはそういう完全な祝福が備えられています。そこでは神さまを永遠にほめたたえるのです。

聖餐はまさにこの永遠に神さまをほめたたえる天の祝宴の先取りです。詩編第23編を読みました。「憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる」（23：2～3）「わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる」（23：5）古来、教会はこの聖書の箇所を聖餐の食卓と理解してきました。それは天にある「主の家」の食卓でもあります。福音書には、カナの婚礼、十人のおとめの譬え話など婚宴の話が幾つも出てきます。またヨハネの黙示録には「小羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ」（19：9）とあります。聖餐の食卓においてわたしたちはこの天の婚宴を見ているのです。イエスさまが十字架でその体を献げて、神さまとの交わりを生きる永遠の命の糧となってくださったことを感謝しましょう。

天の父よ。この世においては試練があり、誘惑があり、魂は痩せ細ってしまっています。でもあなたはイエスさまの十字架とよみがえりの御業を通して、わたしたちの罪を赦し、天の祝宴を備えてくださいました。人生の先にはその喜びの宴が待っていますが、すでに地上においてわたしたちはそれを先取りして、聖餐という手段を通して、天の祝宴に与ることが許されています。どうぞこの聖餐の恵みによって魂が養われ、強められてまいりますように。主の御名によって祈ります。アーメン。